鍛冶屋の長い一日

陸たまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鍛冶屋の長い一日

【Ｎコード】
Ｎ３５７６Ｉ

【作者名】
陸たまき

【あらすじ】
鍛冶屋を営む太助のもとに、幼なじみの小夜（さよ）がやってきた。彼女は何のために小刀を持ってきたのか。

「はぁ…」
鍛冶屋の店頭に座った太助は、今日何度目かのため息をついた。
理由は簡単かつ深刻。客が来ないからだ。
今日も収入無しかぁと、諦めかけたその時だった。
「こんばんは…まだお店開いてる？」
遠慮がちにのれんをくぐってきたのは小夜（さよ）だった。
「小夜。久しぶりじゃないか、どうしたんだ？」
しばらくぶりに見る小夜の姿に、太助の心ははずんだ。
「今日は客よ。……これ、直してくれる？」
薄汚れた風呂敷の中から出てきたのは、刃がぼろぼろになった小刀だった。太助はしばらく観察してから、頷いた。
「ああ、いいぜ。明日にはできるよ」
「…相変わらず、お客は来ないの？」
「ああ。…まぁ、こればっかりはな。こつこつやってくしかねぇよ。…この店は親父の形見だから、つぶしたくねぇし」
「…そうだね」
小夜はぐるりと店内を見回す。
太助の父の死は突然だった。病で倒れたと思ったら、一月ほどで亡くなってしまったのだ。まだ若かった太助は父の技を全て受け継ぐ事が出来ず、店からは客足が途絶えていった。太助の父が生きていた頃と比べると、この店はずいぶんと廃れてしまった。借金の肩に取られてしまったものもある。
「あ、そうだお金――…」
「いいよ。小夜には世話になってるし。それに親父さんだって大変だろう？」
小夜は父親との2人暮らしで、彼は仕事中の怪我が元でふせっているのだ。

「……」
いつもなら軽く笑い飛ばしてしまう小夜なのに、今日は笑顔がなかった。
「小夜？」
「もう…死にたいって…」
「……え？」
「父さん、もう死にたいって言うの」
小夜の目が赤くなっている。
「…どうして。だって治るんだろう？」
動揺を隠せない太助に、小夜は首を振った。
「傷口から、腐っていってるんだって。もう、どうにもできないって…」
「――そんな」
「足を切り落とせば生きられるかもしれない。…でも、そうまでして生きていたくないって…」
太助は、小夜の父を思った。男手ひとつで小夜を育ててきた、男としての威厳を誰よりも大切にする彼を。
あの人らしいとさえ、思った。
……けれど、そうしたら小夜は？

「――だからね」
初めて小夜は笑った。今に泣くんじゃないかと太助は思った。
「死なせてあげようと思って」
言葉をなくす太助から顔を反らし、小夜は逃げるように店を出て行った。

結局太助は、小夜を追いかけることが出来なかった。幼馴染の家だ、行ったって不自然じゃないのに、行けなかった。

真実を知るのが怖くて。
この小刀はまさか……
そう思うたびに、小夜がそんなことをする訳がないと言い聞かせ、仕事に没頭する。
翌朝、素晴らしい出来の小刀が仕上がった。

小夜が来たのは、昨日より少し早い夕方だった。
「こんばんは。…できた？」
笑う顔は、昨日と同じで今にも泣き出しそうだ。
「ああ」
太助は小夜から顔を反らし、ぎこちなく小刀を手渡す。小夜が風呂敷をめくると、小さな明かりのもと、刃がぎらりと光った。
「――…」
小夜が無言のままなので、太助は怪訝に思って顔を上げた。
「…ど、どうしたっ！？」
「……っ」
小夜の目から、次々と涙があふれてくる。
「小夜！？」
小夜の手から小刀が滑り落ちる。乾いた音が響いた。
顔を覆って、小夜は搾り出すように呟いた。
「……出来ない」
「――」
「最初に思ったの。こんなに鋭かったら、簡単に切れちゃう。…危ないって。怖いって。…私やっぱり、父さんを殺すなんて出来ない

…」
「……小夜」
正直に言って、太助は言葉を失ってしまった。
この歳までずっと傍にいた少女の、こんな面を太助は知らなかった。
けれども小夜を支えてやりたいと思うのに、何か言えと思うのに、出てきた言葉は情けなかった。
「じゃあ止めろよ…俺、小夜がそんなことするの嫌だ」
我ながらもっとマシな事も言えないのかと思うのに、小夜はふわりと微笑んだ。
「うん。…私、本当は誰かにそう言って欲しかったのかも」
「……ごめん。俺、もっと役に立つようになるよ。親父や俺のこと、小夜が支えてくれたみたいに…」
「…ねぇ、太助は、思ったことなかった？お父さんのことを、今の私みたいに」
「え」
小夜は小刀を拾い、丁寧に風呂敷に包んだ。
「ごめんね。こんな仕事頼んで」
「いいよ。気にするな」
涙はもうすっかりひいたらしい。太助はほっとして、答えを待つような小夜の顔に気づいて視線を泳がせた。
親父のことを、殺してやりたいって？
苦しむ父親を見る度、何度も考えたことだった。助かる見込みはないと言われてからは、なおさら。
「……あるよ。けど…」
小夜は黙って続きを待っている。
「けど、今だから言えることだけど、本当はもっと長く生きてて欲しかった。苦しくても、つらくても、俺はもっと…　親父と一緒にいたかった」

言っているうちに鼻の奥がつんとしてきて、太助は慌てて明後日の方を向く。
「……そう」
「一緒に行こうか？親父さんを説得しに」

2人は並んで、小夜の家へと向かった。
「太助」
「ん？」
「ありがとう。…私、太助がいてくれてよかった」

「…気にすんな」
日が落ちててよかったと、太助は思った。

その後。
小夜の父親は娘に泣きつかれ、足を失って生きることを決意した。
娘は幼なじみと結婚し、その夫も彼を支えた。やがて生まれた孫達にも囲まれながら、彼の生涯は穏やかに閉じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3576i/

鍛冶屋の長い一日

2010年10月15日22時10分発行